

9章3節 二高 ICE モデル

ICE モデルと ID を組み合わせた「二高 ICEモデル」の取り組み

田尻美千子

(1) IDの特長

インストラクショナルデザイン（ID）は、一貫した信頼できる方法で教育や研修のカリキュラムを開発するための手順に関するシステムである。⁽¹⁾とされています。これによると、すべてのIDの取り組みに反映されなければならないいくつかの特長があるとされています。

- ① IDは学習者中心である。
- ② IDは目的志向である。
- ③ IDは有意義なパフォーマンスに焦点化する。
- ④ IDでは、信頼性があり妥当な方法で成果の計測が可能であると仮定する。
- ⑤ IDは、実証的、反復的、そして自己修正的である。
- ⑥ IDは、通常、チームでの取り組みである。

以上のような特徴が、本校が目指す生徒像に近づくために必要だと考えています。

(2) ICEモデルの特長を生かした本校での活用

ICEモデルは、ポータブルであることが最大の魅力だと感じ、様々な場面で活用しています。本校（熊本県立第二高校）では、本校生が「どうしたら思考が一層深まるのか・どうしたら生徒自ら深く考えていくきっかけになるのか」を常に念頭に、本校生にフィットすることを目指して様々な場面でICEモデルを活用してきました。その意味を含めて、本校でのICEモデル活用を「二高ICEモデル」と称して工夫しながら活用しています。

(3) 二高 ICEモデルの評価場面での取り組み

具体的にどのような評価場面で活用しているかを紹介します。

- ① 形成的評価および総括的評価としての使い方
(フィードバックとなる使い方)
家庭基礎ホームプロジェクトの取り組みループリック内に配置
総合的な学習の時間での「テーマ研究」において共通で活用 など
- ② 形成的評価としての使い方：(やる気や見通しにつながる使い方)
講演会・ポートフォリオの振り返りの記述、思考を促す考査問題の記述（問題内に配置）
- ③ 考査問題の質を考える
(本記事内に資料掲載)
- ④ 質問の質を考える
(群馬県立前橋高等学校の活用例を参考に、授業内での質問する場面で取り組み)
- ⑤ 授業評価

以上のように、活用しているところですが、最近では生徒の振り返りに「いつも何気なく取り組んでいるICEチェックの大事さがわかった」というような記述が見られたりするようになり、生徒自身が自覚的にICEモデルを活用しつつある様子もうかがえます。

(4) 二高ICEモデルの学校全体としての活用

本校は、ICEモデルとIDの2つに共通する「教科を超えて活用できるツール」である点に注目して活用を続けています。学校全体で授業改善を進めていくことについて「ICEモデルとIDを活用し教師のメタ認知力の向上を支援することは、授業改善を促進する」との仮説のもと、以下7つのアプローチによって授業改善を進めています。

①「授業改善のための工夫の見せどころシート（以下、「見せどころシート」）」を作成する。

このシート自体がIDの枠組みで作られており、そこにICEモデルの視点を組み入れた形にしています。このシートを作成するという応用問題に挑戦することで、取り組む過程で理解を深めていくことを主眼としています。

②教科会で「見せどころシート」を検討する。

同教科の同僚によるインスピレーションの獲得を目指します。年度当初の職員会議で作成の提案をお知らせし、例年10月末の学校オープンデーの日の授業について書く（当日提示する）ことを目指して取り組んでいます。この段階を経て、作成した職員作成例を「見せどころ設計マニュアル」（本校作成）にすべて掲載し、職員で共有しています。

③同校の他教科の教師と「見せどころシート」を検討する。

教科を超えた教師によるインスピレーションの獲得を目指します。校務分掌内で交流したりします。また、見せどころシートなどの疑問について会話できる場「IDカフェ」を設定し、気軽に質問ができるようにしています。

④他校の教師と「見せどころシート」を検討する。

学校外の教師の視点によるインスピレーションの獲得を目指します。今年度は「主体的な学びフォーラム」として実施し、県内他校にも呼びかけ参加者がありました。また、主体的な学び研究会の先生方にもご参加いただき大変充実した会になりました。

⑤「IDの前提（高校版）」に取り組む。

IDの代表的ツールに定期的に解答することにより、理解の再構築を促すことを目指しています。「IDの前提（高校版）」は、「IDの前提（病院）」を基に高等学校での活用のために作成したものです。時間モデル・経験学習・9教授事象など、IDを代表する15項目の記述で、それに対する自分の考えを「賛成・保留・反対」のどれかで意思表示するものです。アンケートツールでの投稿形式とし、変化の様子を追っているところです。

⑥生徒の変容の様子を知る。

(ア)「学び方を学ぶ」IDの本を活用し、生徒の感想（各自の振り返りをシェアするお便り）を教師が共有することによって生徒の変容を認知することを目指します。この取り組みの初回での生徒の感想に「何も考えない学び方はやめたい」と印象的な記述があり、その後お便りのタイトルとなりました。
(イ) 生徒が主体となってグループワークを進めることで、生徒が主体的な学びを得られることを教師が認知することを目指します。

(ウ) IDとICEの視点で作成した「生徒主体の授業デザインになっているかを問う授業振り返り」(授業評価の第二高校改訂版)を分析し、授業改善の視点を得ることを目指します。

⑦業績評価に取り入れる

本校の業績評価には、具体的目標に必ずICEモデルおよびIDの視点を入れることになっています。全職員が取り組んでいますので、これによりICEモデル・IDの理解が深まることを目指します。

以上7点をICEの視点で捉えてみると、①～④はIのフェーズ(ID・ICEを知ること。プロフィールを広げること)、⑤～⑦はC/Eのフェーズ(ID・ICEをメタに捉えること)といえるのではないかと考えています。

このように、学校全体の授業改善自体をICEモデルで捉えるなどマクロ的にも活用し職員間の共通認識を深める場面でも活用しています。

1 鈴木克明・合田美子監訳(2013)「インストラクショナルデザインとテクノロジー 教える技術の動向と課題」北大路書房